

Interdisciplinary Unit（学際的な単元）

仮説

MYPで必須の要件とされる学際的な単元を実施することで、生徒に各教科で身につけた知識を統合して、探究的に学ぶ機会となる。また、実社会との関わりを重視した問題を捉えていくことにより、包括的理解を育成し、教科の枠を越えた協働を促進することにつながる。

実施教科

本校においては、今年度の学際的な単元における必須教科を学年ごとに以下のように設定している。

学年	MYP Year	MYP 科目	
1年生	MYP 2	数 学	芸 術
2年生	MYP 3	理 科	数 学
3年生	MYP 4	英 語	理 科
4年生	MYP 5	社 会	デザイン

MYPの要件としては、学際的な単元は各学年で最低1回実施することとなっている。

実施方法

学際的な単元は、事前に年間指導計画に位置付けられており、その計画に基づいて実施する。

- 1 学際的な単元の担当が共同でユニットプランナーの作成を行う。それぞれの項目の詳細については、ユニットプランナーの記載事項詳細を参照して記入する。

※ テーマ設定については、IBのガイドにも示されている6つの統合様式を参照する。

- 2 ユニットプランナーに則って、授業を行う。

- 3 振り返りを行う。

※ 振り返りは、単元を通して毎授業行うことが望ましい。授業ごとに振り返りシート等を用いて自分の達成できたことや、反省点について記録を行う。単元の最後には、単元全体の振り返りを行う。

※ 国語科が作成した、振り返りシートのサンプルがあるので、活用してもよいが、各教科の裁量による。

※ 振り返りは、評価規準Dとして評価すべき項目であるため、振り返りシート等記録媒体を活用して、評価を行うことが望ましい。

- 4 MYPのガイドに示された評価規準に基づいて、評価を行う。評価を記載したプログレスレポートを作成し、それぞれの生徒に配付する。また、評価の過程で算出された各教科の評定や最終的に決定した評定はすべて記録しておく。なお、各教科に準じて、上位、中位、下位生徒の成果物のコピーを4つずつ保存しておく。

評価規準

評価規準A：教科の基礎学力

○学際的理解に関連性の高い教科の知識(事実に関する知識、概念的知識および／または手続き的知識)を有する。

評価規準B：総合力

○各教科の知識を総合し、学際的理解を実際に示す。

評価規準C：コミュニケーション力

○学際的理解を効果的にコミュニケーションするために適切な方法を用いる。

○一般的に認められ、用いられている方法で、情報の出典を明らかにする。

評価規準D：振り返り

- 自身の学際的理解の修得を振り返る。
- 各教科の知識と知るための方法、学際的知識と知るための方法に関し、各々の利点および限界を、具体的な状況に当てはめて評価する。

検証・評価

実践1 1年生 数学と芸術「エッシャーの作品の探究」

1学年では、平面図形における図形の移動を用いたエッシャーの技法を学び、パターンがもたらす美しさに気づき、美しさの表現の多様性について多角的な視点から考察することを学んだ。さらに、パターンがもたらす美しさ（図形の移動、色彩の変化）を取り入れて、隙間がないよう無駄なく図形を配置することを意識し、エッシャーの手法で図形の敷き詰め作品を完成することができた。また、自分の作品の良さを他者にプレゼンテーションすることで、あらためて自身の取組の振り返りを行うことができた。

実践2 2年生 理科と数学（理数探究スキル）

2学年のIDUは、理科と数学の教員が担当しています。このユニットは、反応の速度について探究するいくつかの実験に基づいています。反応の速度と、温度、接続、および表面積の変化への接続をカバーする3つの主な実験を行います。生徒は、各セッションの最後にプロセスジャーナルを作成して、学習経験を振り返ります。3つの実験が完了し、グラフや科学モデルの使用を含む完全なリスク評価とデータ処理が完了すると、生徒は評価タスクの準備をします。生徒はiMovieアプリケーションを使用して5分間のビデオを作成し、学習したことを完全に説明します。彼らの研究からの参考文献の完全なリストがビデオに含まれています。最後に、生徒はページアプリケーションを使用して、単元全体の科学的、数学的、学際的な学習について振り返ります。

実践3 3年生 英語と理科（コミュニケーションデザインスキル）「Global and local Environment」

3学年では『地球上の環境問題について幅広く情報を収集し、根拠をもとに自分の考えを世界に発信しよう。』という目標のもと、まず環境問題について自主的に情報を集め、その環境問題に対する自分なりの解決策を考察し、最後に、記事の要約と解決策について英語を用いたニュースレター形式でまとめた。この活動を通し、現存する環境問題について調べる力、解決策を考え、根拠を基に提示する力、英語を用いて他者に分かりやすく考えを発信する力等を育むことができた。特に解決策の部分では、多角的な視点を用いながら掘り下げて考察し提示することができた。

実践4 4年生 デザイン（家庭科）・個人と社会（現代社会）「社会保障と暮らしに関わる法」

「デザイン」と「個人と社会」のインターディスプリナリーでは、重要概念として「共同体」を設定した。またグローバルな文脈では「公平性と発展」、ATLでは「調査スキル、思考スキル、自己管理スキル」を設定した。生徒は各自、デザインや個人と社会で学んだことをもとに総括的評価課題に取り組みさせた。学習内容としては、主に社会保障と暮らしに関わる制度（消費・環境）について学習した。生徒はインターディスプリナリーで設定した共同体という学びのフィールドのもと、年金保険や公的扶助、PL法やクーリング・オフなどについて身近な生活に照らし合わせながら自己の考えを表現し、探究していた。

全学年を通して各教科で身につけた知識を統合、実社会と深くかかわる事象をとらえ、多角的な見方で思考することを通して、包括的理解を育み、教科の枠を越えた考え方を伸ばすことができた。